

舞 とうん

VOL 25



柳原あや子さん(松山市)作・久万のリンゴ園

特 まちづくりと国際交流 集

- ◆まちづくりと国際交流
松山大学経営学部助教授
／塩次喜代明…………… 2
- ◆広がる姉妹都市交流の輪
松山市国際交流室…………… 4
- ◆柑橘技術交流を中心に広がる国際交流の輪
吉田町／那須 努…………… 6
- ◆新たなまちづくりを求めて
新居浜市／神野 師算…………… 8
- ◆交流により山村は輝く
野村町／玉田 隆…………… 10
- ◆グローバルな視野で文化交流
日蘭人文情報工学研究所を訪ねて …… 12

研 修 レ ポ

- ・まちづくり見聞録in北海道…………… 14
- ・裏方さんの夜なべ談義…………… 16

ふ れ あ い 広 場

- ・リレーでちょっとトーク
広見・新居浜から…………… 18
- ・元気印レポート…………… 20
〈清良染〉
〈広田焼き〉
〈丹原若者塾〉

Information…………… 26

- ・私の推薦する本
- ・TOWNタウン通信
- ・研究会議からのお知らせ



一、国際化へのスタンス

われわれがよく使う国際化(internationalization)という言葉が、英語になじみにくい言葉だと言われる。事実、『ランダムハウス英和大辞典』で、internationalizeの訳語を見ると、「国際的にする」と「国際管理下におく」の二つしかない。つまり英語では、多くの国がある事柄を承認するような状態を、国際化と言っているようである。

ではこのような英語の意味に即して、現在展開されている日本の国際化の努力を説明するとどうなるのか。簡単に解釈すると、わが国の閉鎖的な側面を取り除いてゆくことである。厳しく解釈すれば、各国が不安なり不信なを抱く日本という国家を国際的な管理

の下におくことになりかねない。これでは問題国が国際的な監視のもとに晒されているような話ではないか。

断るまでもなく、こんな国際化を考えている人はいないはずである。考えなければならぬのは、英語になじまない国際化に我が国が取り組まなければならない現実である。陸伝いに国境を接する国々では、人々の往来は実に日常的であり、国際化という言葉は死語も同然であろう。西洋諸国やアジア諸国は正にそうであるに違いない。

しかし、我が国は違っていった。海で隔てられ、言葉も文化も社会もあまりに近隣諸国と異なる発展を遂げた国が外国と交わるということとは、常に身構えて取り組まなければならない非日常的な営みである。しかも、そんな国が世界経済社会の一方の主役であることに、今日の国際化の問題が生じる素地があるのではないかと私は考えている。



それゆえに我が国の国際化への努力は、国際社会の一員として信頼されるパートナーシップを確立すること、身構えてしなければならない国際交流から身構えないで国際交流のできる国になることを目指していると思うのである。理想はヨーロッパの国々のように、日本がごく自然に国際的に認知される状況を、対外的にも対内的にも確立することである。

二、国際交流の考え方

私はこの夏に貴重な体験をした。愛媛県国際交流センターが、「村からの国際化キャラバン(八月九〜十日)」という他に例を見ないユニークな事業に取り組んだ。私はそのキャラバンの一員として岩城島・生名島・岡村島(関前村)を訪ねて、パネルディスカッションを繰り広げたのである。夏の暑さに弱い私はこのところ夏を海外で過していただけに、願ってもない海外旅行となった。ただし、瀬戸内海という限定付きの海外ではあるが。

この言い方は、島の方々に大変失礼なものであることを承知している。しかし、あえてそう言いたくなるほど、松山での生活は島から遠く、島に渡る思い込みは、私にとって海外にでかける際のそれとあまり大差はなかったのである。私の意識では、瀬戸内の小さな島は国際化の流れとは無縁の遠い田舎であったのである。そこで国際化を考えるとというの

は、逆転の発想だと思った。

こんな思いを抱いたのは私だけではなかったようだ。パネリストを努めた外務省国内広報課長の伊東喜昭氏はこの企画に強い関心を示して乗り込んだ。国家の高級官僚が自らの意思で参加するのは異例中の異例である。

伊東氏は立場上、日本の国際化の必要性を肌で感じているばかりか、それを強力に推進する責任を負っている。その視点から伊東氏は、国際化への理解と行動は全国民レベルに要請されていることを熱っぽく力説していた。

「小さな島の小さな村と言えども例外ではない。むしろ国際化と無縁であると思われる地域が、国際化に理解を示すことこそ明日の日本の姿でなければならない」と。

では、ローカルの国際化はどう進められてゆくべきなのか。パネリストのフォックス夫妻（東雲短大講師）は、示唆に富んだ意見を披露した。「外国人は物質文明に毒された都会よりも、精神文化が豊かに残るローカルに日本の真の姿を見る」と語り、「家庭という生活の場レベルでの国際交流が人間としても自然な姿である」と言うのである。

そのことを裏付けるように、広島県の作木村から参加した安藤周治氏（過疎を逆手にとる会会長）は、「村にこそ日本の良さがあり、だから村こそ国際化することが必要である」と述べていた。そして、七年間続いている広

島大学留学生の夏期ホームステイでは、ジイババ（お年寄り）の方言丸出しの接し方が交流を深めるきっかけになっていると興味ある事例を紹介した。

もうお分かりであろう。国際交流は草の根レベルで求められており、しかもその期待は外国人に強いのである。外国人にとってローカルは大変に魅力ある美しい日本の暮らしがある場所なのである。そこで培われた文化性こそを日本はもっと誇るべきであると言わねばならない。

私はこのキャバンの熱が冷めない九月に、関前村の獅子舞いがドイツに派遣されることを知り、島の文化が世界に通じていることを確認した次第である。

三、国際交流は町づくり

人類は平等であると誰もが信じている。欧米では平等の意味に、一人ひとりが異なる個性の人間であることを認め合うことを含ませている。だが、日本では人間は皆同じであるという没個性の方に意味解釈されているようだ。これには個の尊重社会と集団尊重社会の差が反映しているのかもしれない。もしそうだとするならば、国際化は町づくりの有力な武器になりうる。それはこういうことである。町づくりの基本は、住んでいる人が誇りをもって生き生き暮らせる場をつくることであ

ろう。住んでいる人の顔が輝いていると、人々はその町に魅力を感じる。ところが、集団尊重社会では、生活のエネルギーが集団の中に閉じ込められがちなので、そこで暮らしている人には自分たちの暮らしの魅力がどんなものか分り難くなってしまう。これでは、皆同じ暮らし振りであるように気配りしながら生活しているかのように思えてくるに違いない。

魅力の発見には、自分たちの暮らしについてよそ者の目が必要である。しかも、この目はこれまでとは大きく異なったものであるほど、発見される魅力は新鮮になる。国際的視点はこれにうってつけである。国際交流を通じて、外国を学ぶばかりではなく、彼らの目を通じて自分たちを知ることができるのである。同時に問題点も発見することになるかもしれない。問題の発見は、明日を良くする機会の発見に他ならないから、このことも町づくりには大切である。

いまの暮らしの中で、外の世界に触れることを通じて複眼的な視点を獲得することが国際交流の基本である。このことは、個の尊重を学び、自分の暮らしの魅力を発見することである。だからこそ国際交流は町づくりであり、国際的に開かれた国土づくりに通じるのである。また国際交流の進展が、内なる国際化を促進させるうえでも重視されるべきことに異論があるはずはない。



国際化時代に対応できる人づくり

特に、中学生の海外派遣事業では、毎年、三十数人をサ市とフ市を中心に派遣し、今までの派遣生徒数は三百人を超えています。昨

年の派遣生の一人は「楽しい思い出をつくるだけでなく、その国の良さを学び、その国の人々の姿を通して、自分の国と自分自身を見つめ直すように努め国際社会に生きる日本人になりたい」と報告書

松山市には外国に姉妹都市が二つあります。一つはアメリカ・カリフォルニア州サクラメント市、もう一つはドイツ・バーデンウツテンベルク州フライブルク市です。サ市とは一九八一年八月、フ市とは長い友好関係を経て、一九八九年四月に姉妹都市提携をしました。以来今日まで、本市の姉妹都市交流は、青少年交流をはじめ市民代表団の相互交流、伊予万才、お琴、生花などの文化交流を中心に広く市民の間に交流の裾野を広げながら定着化が図られています。



ホストファミリーの子供達とパーティーを楽しむ中学生の海外派遣生（訪米班）

の中で述べています。次代を担う青少年の夢とロマンを育み、国際化時代に対応した人材育成を目的にスタートした当事業は今年で十回目を迎え、本市の国際交流の核心事業となっています。

さらに一九八七年十一月、新田高校とサクラメントハイスクールが姉妹校として調印。以来、両校は毎年、春期及び夏期休暇を利用して、ホームステイを中心とした生徒の相互派遣等、活発な交流活動を展開しています。

本年四月には、愛媛大学医学部とカリフォルニア大学デビス校が学術交流協定に調印。医学の分野での教育、研究などの協力を核に、教授、学生の交流や専門資料の交換計画など今後の学術交流が期待されています。

また、一九八七年十月には松山中央郵便局とサクラメントメイン郵便局が姉妹郵便局として調印。松山ロータリークラブとサクラメントロータリークラブが本年四月に姉妹クラブとして調印するなど、色々な分野での姉妹関係が誕生し

ています。両市の結び付きをさらに強固なものとする姉妹関係の成立は姉妹都市提携の大きな成果となっています。

本市の国際交流の根幹は、国際化時代に対応できる「人づくり」であり、国と国との外交とは別に、都市と都市、市民と市民が直接結び付き、友情を育みながら相互信頼の絆を強める交流を推進しています。

姉妹都市を実感できる

都市づくり

こうした中で、姉妹都市交流を通じた「都市づくり」が芽生えています。市内主要道路を「サクラメント通り」「フライブルク通り」



愛大医学部とカ大デビス校の学術交流協定調印式

として命名したのをはじめ、サ市とフ市から贈られた公衆電話ボックスの設置などが市民に親しまれています。

また、サ市には現在「マツヤマ小学校」が建設中ですし、フ市には「マツヤマアレー（通り）」の命名や日本庭園が建設開園されています。

とくにこの公園は、シーパーク（湖公園38ha）の一角に建設されたもので、フ市からは石材や庭木



フライブルク市に開園した日本庭園

等の庭園建設に必要な資材を提供、本市からは庭園技師を派遣し、庭園設計等の技術協力を行ったもので、まさに両市の友情と技術が結びついて誕生したものです。



庭木手入れ技術研修に来松しているフ市の人

以来、公園の維持管理のための庭園技術者の来松をはじめ、日本語研修、砥部焼研修やパン職人の来松など各分野での技術、文化交流へと発展しています。

基金十億円の

(財)松山国際交流協会

地方の国際化が自治体行政の課題とされるようになったのは極めて

て近年のことであり、松山市は、一九八二年四月、民間レベルの国際交流を進めるため基金五億円（現在は十億円）の財団法人松山国際交流協会を全国に先駆けて設立、本格的で多彩な活動が始まりました。中学生海外派遣事業はもちろん、国際意識の高揚を図る国際理解セミナー、英語・独語・仏語・中国語など各種語学講座や外国人のための日本語教室など事業推進の母体となっています。

姉妹都市十周年記念の 友好のシンボル誕生

今後の姉妹都市交流も「人づくり」「都市づくり」を基調に幅広い市民の参加によって友好交流を推進し、揺るぎない姉妹都市関係を築いていきたいと考えています。

去る本年四月、姉妹都市提携十周年記念式典のあいさつの中で、アン・ルーディン・サ市長は「交流に参加した皆さんが一枚一枚の花びら。この一つひとつが大きな交流の花を咲かせています。本年

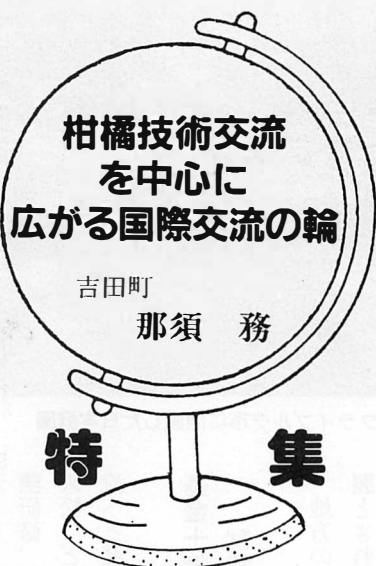
を姉妹都市年として一層関係を深めていきたい。」と述べられた言葉は、これまで交流に携わってきた両市民への感謝と両市の揺るぎない友好関係を確信するものとなりました。

そして本年八月二十日、サ市との姉妹都市提携十周年を記念して製作していた友好のシンボル「ゴールドマイナー（金を採る人）」像の除幕式がサクラメント通りで行われました。



「ゴールドマイナー」除幕式

この像は、お互い全く知らない者同士が十年という年月をかけて理解を深めてきた「友好の証」、さらには本市の目指す国際交流の次のステップへの出発点となるものです。



交流への道

吉田町では、いま柑橘技術交流を中心に、中国浙江省象山县との間で交流の輪が次第に広がろうとしています。

この四月、私達は同県から派遣された十名の柑橘技術研修生を受け入れ、本格的な交流を始めたばかりですが、研修生達は十戸の農家にホームステイして、家族の方々と地域の人達と生活を共にしながら、柑橘栽培技術の研究に元気に取り組んでいます。

これは、昨年十月、吉田町から町長以下六名からなる「柑橘交流代表団」が象山県を訪問した際、取り交わした同県と吉田町との柑橘交流に関する合意書に基づき実現したもので、吉田町農業農村活性化推進機構が受け入れ機関となり、農協や果樹試験場南予分場は



柑橘技術研修に励む研修生

じめ多くの関係者の協力のもとに進められています。

草の根の交流から

発展した国際交流

そもそも吉田町と象山県との関わりは、丁度今から十年前（一九八一）、愛媛県日中農林水産交流協会が窓口となって、初めて浙江省から五人の農業研修生を受け入れたことから始まりました。その後も一部の研修生と受け入れ農家の間で親密な交流が続けられており、たまたま、その中に象山県政府の要職に

日中農業交流推進体制

吉田町農業農村活性化推進機構	
構成	町、町議会、農協、農業委員会、土地改良区、消費者団体、商工観光業者等の代表者及び字識経験者
目的	地域の創意工夫と主体的取り組みを基本に立地条件に即した農業農村の活性化を推進する
※ 研修生の受け入れ主体となります	

専門部会	
構成	町、町議会、農協、愛媛県日中農林水産交流協会吉田支部の代表者
目的	研修生の受け入れ、交流用の派遣等を通じ、日中両国の友好交流を深めるとともに、両国間の農業農村の活性化に寄与する

吉田町日中農業交流促進協議会	
構成	受け入れ農家及び町、町議会、農協、愛媛県果樹試験場南予分場、愛媛県日中農林水産交流協会吉田支部等の代表者
目的	研修生の研修が円滑かつ効果的に行われるため必要な事業を行う



就いておられた方がいたことから、吉田町との交流の話しが持ち上がり、前述の「柑橘交流代表団」の象山県訪問となったものです。

その際、双方の間で「象山県と吉田町の長期にわたる友好的な協力関係をうちたてることに関する意向書」と「柑橘交流に関する合意書」が取り交わされ、正式に相互の交流が発足しました。

それに先立ち、昨年夏、吉田町の農業青年を中心メンバーとする友好交流団が、訪中の途中同県を訪れ盛大な歓迎を受けるなど機が熟しつつあったことも幸いしたものと思われ



夏まつりの踊りにも参加して交流を…。

ます。ともあれ、研修生と受け入れ農家の長期にわたる交流や農業青年の訪問などいわゆる草の根の交流が発展して実現した国際交流であることは間違いないところです。

広がる交流の輪

昨秋、柑橘交流代表団の象山県訪問によって成立した合意の趣旨は、長期の友好協力関係を保持発展させるために、お互いが必要に応じ適宜に訪問団を派遣すること、当面三年間を期間として毎年十名の象山県柑橘研修生の派遣と受け入れを行うこと等を主たる内容とするものでした。

十名の研修生の受け入れも、こうした合意に基づくものですが、この四月に研修生を引率して来町した象山県副県長との間で、今秋四か月間の予定で柑橘加工技術研修生三名の受け入れについても合意が成立し、近く来町の運びとなっています。

さらに、十月二日には象山県農業技術視察団の一行六名が来町し、町内の農業関係施設等を視察したり関係者との交流を通じ相互理解と友好を深めることになっています。一方、吉田町からは、答礼として十月中旬に八名の友好交流代表団を派遣することにしており、こうした人の往き来を基礎に双方の交流の輪が一層広がって行くものと期待しています。

再び草の根交流へ

吉田町の国際交流——中国浙江省との交流はようやくその緒についたばかりですが、研修生達は本来の研修の妨げにならない範囲で、祭りや地域の諸行事等にも積極的に参加するなど相互理解と友好増進にも努めています。

町内のある床屋さんは、研修生の理髪サービスを引き受け、またある受け入れ農家の方は、長男の五月五日の端午の節句に「つまらないものですが」と、遠く中国から持ってきたプレゼントを贈られ感激したと述べています。恒例の夏祭りには、研修生全員でカラオ



「你好」
歓迎レセプションで受け入れ農家と

ケ大会に参加して、「愛は勝つ」を合唱し、大きな拍手を受けました。また、農協婦人部と一緒に踊りにも参加しました。こうして除々にではありますが、交流の輪が期待どおり広がっていることは心強い限りです。

今日、国際化ということが大きな流れとなっていますが、国際化とは「ヒト」「モノ」「文化」「情報」が頻繁に自由に往き来することと理解しています。そして、その基礎になるものはやはり「ヒト」の交流であり、モノや文化や情報はそれについて来るものであるうと考えています。いま吉田町では、ようやく「ヒト」の交流が始まったところです。今後は、この人の交流の上に技術や経済、産業の交流がさらに進展し、国際交流が地域の活性化や振興に結びつく日の来ることを願っています。



お経のように唱える人は多いが、その本当の意味について答えられる人が意外に少ないのが『国際交流』なのか

もしれない。

今、国際交流が

トレンド

「国際化」は、「高齢化」「情報化」とともにマスコミ報道や講演会などで使われる言葉の三種の神器といった感がある。

普段は、何の抵抗もなく聞き流し、その意味も何んとなく分かったような気がして使っている言葉である。

しかし、改めて、『国際化』とは？『国際交流』とは？と聞かれたときに、ハタと困ってしまう。

そして、押し寄せる『国際化』という波を、ボードセーリングよろしく、カッコよく乗りこなすことがトレンドといばかりに、全国各地で、「やれ、海外派遣だ。外国人との交流会だ」と国際化への波乗り合戦を繰り広げているのを、やや斜に構えて見るのは、『国際交流』を担当する行政マンとしては無責任すぎるのだろうか？

新居浜市の

国際交流の現状

それでは、新居浜市はどうなのか、その状況を簡単に紹介してお

きましよう。

まず、行政においては、① 中学・高校生の海外派遣 ② 市職員の海外派遣研修 ③ 中国山東省徳州市との交流 ④ オーストラリアへの視察団の派遣 ⑤ 語学指導などを行う外国青年招致事業の実施 ⑥ 英文観光パンフレットの作成 ⑦ 新居浜市国際交流懇談会の設置 ⑧ 新居浜市国際化推進会議の設置 ⑨ 国際交流基金の設置などがある。

民間レベルに於いては、① 新居浜中国交流促進協会の中国山東省徳州市との交流 ② ライオンズクラブやロータリークラブなどの交換留学生 ③ 新居浜市生活文化若者塾のインターナショナルパーティーの開催 ④ 善意通訳による愛媛SGGクラブ新居浜支部・新居浜ボランティアガイド会の設立 ⑤ 新居浜国際電子ビジネス専門学校への中国人留学生の入学 ⑥ 企業の外国人研修生の受け入れなど、国際交流の動きは活発である。

ここで、「それぞれの事業につ

いての説明は紙面の都合上割愛させていただきます」と格好をつけてみたいところですが、賢明な読者諸兄には、おおよその見当がつくものばかりではないでしょうか。いかにもこれぞ国際交流というしろものばかりで、特別特色のあるものでもありません。

もうすでに、お分かりのことと思いますが、文頭の文章は、実は、国際化とは？国際交流とは？という迷路の中であえいでいる筆者自身の姿なのです。



第1回インターナショナルパーティー（主催若者塾）

国際交流への

道しるべ

そこで、強力な助っ人に登場願うことにしよう。助っ人とは、新居浜市国際交流懇談会の提言である。

この提言は今後における、新居浜市の国際交流によるまちづくりへの指針となるべき、『国際交流基本構想』の策定の必要性を説いたものであり、これは迷路からの脱出を示す道しるべである。

では、その内容を紹介します。



徳州友好視察団の徳州小学校授業参観

(H 3 . 4 . 15)

一、国際交流の基本理念

国際化を推進していく基本的な考え方は、国際化を特別なこととしてとらえるのではなく、ごく当たり前のこととして日常生活の中にとり入れていこうとすることである。

すなわち、国際化という視点でまちづくりを見直し、市民も、外国人も、来訪者も共に快適に過せる質の高い生活文化都市を構築し、個性的で魅力ある新居浜づくりをめざすことである。

また国際交流の基本的な考え方は、人間尊重を基本理念として、広く世界の国々との人的交流、文化交流、地域産業交流など視野の広い多様な交流を促進し、市民の国際感覚、国際認識のかん養、地域産業、経済の振興など世界に開かれた「魅力ある国際産業・文化創造都市」をめざすことである。

二、国際性豊かな人づくり

自国を愛し、ふるさと新居浜を愛する情熱を持ちながら世界の発展に貢献できる、真の国際人となり得る国際性豊かな人づくりに努

める。

三、国際性豊かな風土づくり

国際化は特別なことではなく、外国人が住んでいることや外国人との交流があることが普通であるという風土を醸成する。

四、国際性豊かな産業づくり

経済大国となった日本は、その経済力を活用して世界に貢献することが求められている。

本市においても、このような経済貢献型社会に対応した産業経済の振興に努める。

五、国際性豊かなまちづくり

世界に誇れる街とは、とりもなおさず市民にとっても住みやすい街であり、外国人や若者が住みたくなるような個性的で魅力ある街である。

そのためには、市民にとっても、外国人にとっても暮らしやすい国際性豊かなまちづくりに努める。

六、国際性を育む体制づくり

国際化は、あらゆる分野で活発な国際交流が行われることによって促進されるものである。

そのためには、行政の推進体制



第2回インターナショナルパーティー (H 2 . 12 . 3)

の整備、国際交流協会の設立、国際交流センターの設置、国際交流基金の充実など行政と民間における国際交流を推進するための基盤を整備し、本市の国際化を育む体制づくりが必要である。

この提言をどう生かすのか、悪戦苦闘の日々がまだまだ続きそうである。しかし、国際化という視点に立った新たなまちづくりへの挑戦もあり、『苦難の道もまた楽しからずや』といった心境である。



① 過疎地に「歓喜」の大会唱

人口一、〇〇〇人の山里「惣川」に、子供達と三十三人のドイツの人達による歓喜の合唱がございました。

去る六月三十日、七月一日の二日間、ドイツのキール市やベルリン市の人達が惣川に滞在した。

一日目の歓迎行事は、惣川にある「野村少年自然の家」を会場に行われた。この自然の家は、かつて惣川にあった小学校四校の一つである。過疎化の進行によって、大野ヶ原小学校のみを存続させ、残りの三校を統合して移転した。廃校になった旧惣川小学校を改修して、自然の家の施設にしたものである。

古いピアノの残っている集会室でベートーベンの「歓喜」が合唱された。県下に四箇所しかない八つ鹿踊りや迫力満点の牛鬼のデモ

ンストレーション、もちつきなど多彩な歓迎行事が続いた。各ホームステイ先で用意されていた着物を着ての惣川の人達との交流に、国際交流には充分馴れているドイツの人達も大変に感激されたようであった。

この国際交流の実行委員長は、七十歳の方であり、ほとんどのホストの方が七十歳前後である。(惣川の地域づくりの推進力は、シルバーパワーなのである)、各家庭には、松山などで生活する子供達も帰り、山里での国際交流は、一層にぎやかになった。

八月には惣川から四人がドイツへ行ったが、「ソウガワデスカ」と質問されたそうである。このドイツとの交流の大きな成功は、一九五五年(昭三十年)に野村町に合併した三、六〇〇人の惣川村が、社会環境の変化によって一、〇〇〇人にまで激減しながら、この数年間の都市との交流により、ムラの再生に向かって劇的に変革されつつあることを示している。

② 交流への挑戦

ムラの再生をめざした挑戦は、小さな若者のグループによる廃屋の改修から始まった。

それは、私が病気療養のために東京から実家のある惣川に帰って、一年余り経った一九八七年の春だった。東京に戻るまでに、惣川に点在する茅葺き屋根の廃屋を改修して、東京

と惣川の交流の場にしたいというのが、当時の私の夢だった。

私の実家の隣に茅葺きの家があった。県道の拡張によってこの家も無くなったが、私は一人でこの風景を一枚の油絵に描いていた。間もなく、私の考えを聞いてくれる七人の青年が集まった。



牛鬼も歓迎

この山村に残る青年は、「少なくとも心を過疎にするまい」と、茅葺き民家の廃屋をはじめ、惣川の固有の自然・文化・歴史を活かして、自由に自在に楽しく生きようという「自在舎」グループを結成した。

とはいっても、茅葺き屋根の廃屋を改修して、

東京の女子大生達を呼んで交流しようという、全く新しい私の提案には、メンバーも本当は半信半疑であったように思う。グループ発足直後、今日以上に信用のない私を応援してくれたのは友人達である。

大分で絵の教室をやっている友人は、生徒である若い女性二人を連れてやって来た。東京でイラストレーターをやっている友人は、美人の妻を同伴して来た。二十歳前後の女性グループを結成し指導をしていた高校の教師は、その若い女性達ばかりでなく、東京での学生時代の友人達まで連れて来た。

自在舎の家は、内も外も改修中であり、横には茅葺き屋根の牛小屋が崩れかかったままであった。この時、高校教師と共に来たのが、山口大学助教授のYさんである。以来、この大学の惣川研究は今日まで続いている。春、



「歓喜」の合唱



夏、そして十一月一、三日の秋祭りには、惣川を山口大生達が徘徊し、大学のキャンパスのようになる。これに三年前から東京家政学院大学の女子大生達が加わった。

ドイツの人達との国際交流を企画し、推進したのは松山工業高校教師のIさんである。はじめ自在舎と四国最大規模の茅葺き民家土居家主宅との結びつきから始まって、惣川との関係も新しい段階に入っていた。

③ 交流によって再発見する自己と郷土

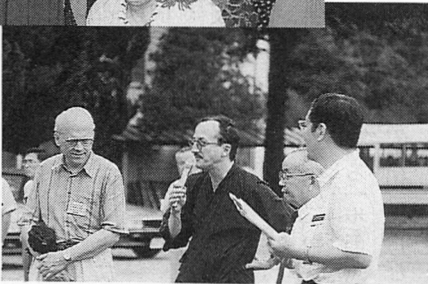
この数年間に惣川を訪れるようになった人々は実に多彩である。芸術家、大学の研究者、学生、アウトドアスポーツのインストラクター、写真家、クラフト作家など。国別でもカナダ・USA・オランダなど。

都市との交流や国際交流は、惣川のような愛媛県で最も過疎化の激しい地域でも、この土地に固有の価値が存在することを、理論ではなく、直接体験することが出来るという意味でもたいへん重要である。自らが生活する地域に対する誇りや郷土愛が無ければ、外から来る人々とのコミュニケーションは深まっていけないからである。交流は必然的に自分とその環境に対する認識を深める契機となる。

昨年、高知県で最も小さな村である大川村

を訪ねた時、そしてまた、大川村ふるさとむら公社の朝倉理事長が山口県での講演の後、わざわざ惣川まで私達を訪ねて頂いた時に痛切に感じたことであるが、日本にも地球にも、地方や過疎は無いということである。自らが生きる土地の固有の価値には、かけがえないのである。人間すべてが侵すことが出来ない尊厳を持っているように、潰されてよい土地もなければ、自信を失い従属しなければならぬ地域もないのである。

情熱をエネルギーとして交流を進め、自らの生きる土地の固有の自然・文化を守り、そして自己を磨きつつ、もっと楽しく、もっと生き生きと輝きたいものである。



▲惣川の子供達も八つ鹿踊りを...

お別れのセレモニー（ダンケ！）



所を訪ねました。

日蘭人文情報
工学研究所とは

オランダ北東部
のフローニンゲン
市は、肥沃な農業
地帯を控え農産物
を集散する人口十

都市です。ここにオランダ国立大
学の三つの内の一つであるフロ
ニンゲン大学がある。その大学の
付属機関として一九八九年十二
月、中山町に開設されている。

なぜ俳句研究を

21世紀を展望した新たな町づく
り施策の一つとして、国際化社会
に対応すべく、海外への人材派遣
や交流を実施しながら国際的な感
覚を持った地球サイズの人づくり
あるいは、人と人との交流と異文
化体験による発想の転換や文化意
識おこしなど、行政と民間レベル
での国際的な展望に立ったまちづ
くりが広がりをみせています。
そうした今日、外国の方から見
て今の日本をどう受けとめている
のか、今後私達が国際交流をどう
進めればいいのか等を中心に話を
聞くため、農村文化に興味を持っ
て、日本文学（特に俳句）の研究
をしている日蘭人文情報工学研究

アイザクソン繁子さん（アメリ
カ）は、「日本文学や仏教美術を
勉強している内、俳句は、もっと
も立派なものであると思ったので、
一生勉強し研究したい」とおっしゃ
る。なぜそう思っているのかお尋
ねすると「人間として生まれてく
るのが最も幸せな一生。従ってそ
れを十分に自分や皆んなのために
人間の義務を果たすのが人間の道」

「和歌は仏様で俳句は菩薩だ」と、
仏教文学と俳句のつながり等も話
され、深く研究されているのがう
かがえるし、仏教の世界にも興味
を持っているせいか人間の生き方
等についても少々考えさせられる
ことしきり。



アイザクソン繁子さん

スチュアート所長さん（オラン
ダ）が、日本に来て、俳句のデー
ターベース化を行っているのは、
女史の御主人（今は故人となつて
います）との出会いが縁である。
所長さんと彼は大学の同年で、コ
ンピューターを応用して俳諧の研
究を少しづつ行っていたことに端
を発するようだ。

その後、亡くなった級友の奥さ
んであるアイザクソン繁子さんに
話し掛け、十数年前オランダで国
際俳句プロジェクトを一緒に結実

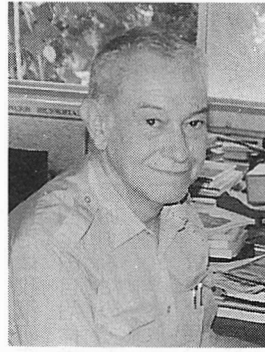
させる。お二人の俳句を研究する
ことへの思い、あるいは、一つの
物事に掛ける姿というものは、実
に立派な事であり芯の強さには頭
の下がる思いと同時に、またまた
反省させられることばかりである。

交流への広がり

アイザクソン繁子さんは、現在、
ローマ字、英語、日本語の「歳時
記」を発刊にこぎつける一歩手前、
母国や海外の人々が俳句に親しむ
段階で読んでくれたら役に立つは
ずと最後の追い込み中である。歳
時記を読むことによって日本なり
日本語を正しく理解し、今後の文
化交流の上で大きな道が開けてく
ることや各国の俳人が、それを参
考にして、自国の「歳時記」を作っ
てくれることを願っている。

そうした研究活動の暇を見つけ
て、所長さんや女史は、小中学生
や婦人の方に英語の指導を行った
り、剣道で汗をかく。また時々近
くのお寺で座禅を行ったり、地域
の行事に参加したりと町の人々と
の交流にも積極的である。近所の

人達も出入りし時には、物々交換等も行われているようである。そうした付き合いがやがて本物となり国際交流へ発展するものと思われる。



スチュアート所長さん
(フローニンゲン大学文学部教授)

日本の印象は

スチュアート所長さんは、戦後京大へ三年間留学していたし、アイザクソン繁子さんは、通算すると十三年程日本に住んだことになり、外国から日本へ来たといっても、特別思っていた日本と現実の日本とのギャップや異文化ギャップはなさそうである。ただ、「大都会は欧州と同じように乱れている。外国人が望む本当の文化を捜すのには地方の農村へ行かなければならない。オランダもそうです」と所長さんは言い、女史は、二十

数年前に日本に初めて来た時は、人間がとてきれいですごく丁寧でずいぶん驚いたというか感心したのですが、現在は、残念なことにだんだん消えていってると指摘される。永く住んだ経験のある愛媛については、柔らかいし、人も優しい。また、自然も優しく感じる印象をお持ちのようだ。

こんな町が望ましい

外国の人が生活して行く上で、どんな町がいいのかお尋ねすると「私達外国の人でも安心して暮らせる優しい町がいいですね」また「誰がいつ来ても皆んな丁寧である町づくりが素晴らしいことです」そして「町自体元気であって欲しいですね。元氣のない町は教育の種を播けばいいんです。播けば生えるんですから」「自然には意味がありますが自然も大切にしたい」との返事。どの国の人も、やはり安全で快適で瞳の輝く町が素敵な町といえるようだ。

国際交流は

今後、私達が国際交流を進める

に当たり、どういったことに配慮しなければならぬのかご意見をお伺いすると、「交流について深く見てませんが、交流の回を重ねながら、お互い自国や相手国の、歴史や文化を充分理解し、人間同志だという気持ちでぶつからないとダメ。人間性を見たり、言葉の違い等を見ていたらいつまで経っても違ふところだらけですよ。同じ人間は、同じ立場で同じ土俵の上に立たなきゃならない、そこから輪になりお互い迷惑が掛からないように考えて交流すべきである」と述べられた。また、お互いある程度プライドを持っているから、相手の言うことや生活の仕方とかに對してもっと広く見ないと交流にならないのではないのか。その国は何か良く出来、何が立派なのか、その立派な部分を話し合い、それを目標に交流すればいい結果を得られる旨のアドバイスを二人にいただく。

私達に期待するもの

私達日本人は、何を果し、どう

いった点に気をつけなければならないのかお聞きすると、「交流については、相手の国の現代を見るより歴史を勉強しなさい。また、今後日本は、自分達の昔からの文化を守っていかないとダメ。世界中の国々で文化が消えつつある」と言う。「日本の文化は、非常にいいし、そうした文化を守り続ける人、非常に感心します」と、今の日本の生き方にやや不安と期待を込めておっしゃる。最後に、「昔の日本がそうだったように、世界の人々人間はどれ程立派になれるのか見せないダメ」と指摘する……。

お二人とも色々な国で生活した経験があり、日本が好き、愛媛が好き、そして農村が好きだから私達に期待するのかも知れない。

異国の地で暮らして行くのには、お二人のような強い信念が必要かもしれないと思うと同時に、今後、私達が進めるまちづくりや国際交流においても強い信念が必要だと感じた。

(取材／上ノ田)

まちづくり見聞録 in 北海道

（愛媛県まちづくり総合センター） 山岡 強

研修レポート

【あー 懐かしの北海道】

初めて北海道を訪れたのは十九才の学生の時。その時の印象は、とにかく土地の広さに圧倒されながらも、何か、自分が時間と共に大きく成長していくようであった。あれから十年、今、冷静に現実を見てみると、「あー、やっぱり思い過したかったか。」とくるのである。

今回訪れた目的は、八月三十、三十一日にかけて帯広市で開催された『第八回全国自治体政策研究交流会議』『第五回全国自治体学会帯広大会』に参加するためである。

再訪の地「北海道」は、今回のような顔を見せてくれるのだろうか。

【ようこそ、グリック王国へ】

太平洋上を飛ぶ飛行機から、襟裳岬のその雄大な景観を眺めながら帯広空港へ降りると、なんと



グリム兄弟の銅像と木組みの家
(グリック王国)

そこは中世ドイツの街のようだった。

まるで、タイムスリップでもしたかのような、帯広空港に隣接する「グリック王国」は、開国して二年。グリム童話とグリム兄弟をテーマとし、中世ドイツの街を忠実に再現したメルヘンパークである。グリム童話やグリム兄弟ゆかりの歴史的建物の再現、四百年前のベルリンの石畳、十七、十八世紀にヘッセンに建てられた古い木組みの家、本物の銅像から铸造したグリム兄弟のブロンズ像……ここを訪れた人は、ドイツメルヘンの歴史に直接触れることが出来る

のである。さらに、広場でアトラクションをしている大道芸人、遊園地の乗り物、ビールもソーセージも特産品も、全てドイツから直接やってきた物ばかりなのである。このように、北海道に居ながらにして、ドイツの旅を体験出来るのが、グリック王国ならではの特徴である。

【第八回全国自治体政策研究交流会議】

今回は、現在世界的に最も重要な問題として取り沙汰されている環境問題について、活発な意見交換が繰り広げられた。テーマは『人間と自然にやさしい地域づくりを考える』である。

大気汚染、水質汚染など様々な自然破壊が世界各地で、今この瞬間にも進んでいる。そして、地球規模での政策が、検討、討議、採択されている。それがなんとか具体化するの、二十一世紀になり



第8回全国自治体政策研究交流会議

努力は空しいと評価されるかもしれないが、空しくない対策が実現するのを、ただ待っていれば何とかなるような状況ではないようである。現実をキチンと認識するために、まず、自然に優しくする事から始めようではないか。

そうなのだそう。しかし、そうした対策の実現まで、手をこまねいているわけにはいかない。今すぐ自分達で出来る対策、自然と共に生きていく努力が必要だと思う。自然に優しい暮らしを考え、ほんの少し実践してみるだけで、どれほどの浪費が我々の身の回りにあるのかという事に気付く。身近な、すぐ出来ることから、個人レベルで始める事が大切なのである。出来る事はたくさんある。そんな



第5回全国自治体学会帯広大会

【第五回全国自治体学会帯広大会】

全体会の後の第二分科会は、
 へ農村を取り巻く状況は厳しく、
 若者の流出は続き、農林業の担い
 手の行く末は心細く、環境の荒廃
 も目立っている。こうした状況に
 立ち向かい、都市に対峙しうる
 「偉大な農村」「しっかりとイ
 ナカ」をつくりあげていくため
 は、広い居住スペース、身近な自
 然、濃密な地域社会のコミュニケー
 ションといった、農村ならではの
 可能性を生かし、農村における新
 しいライフスタイルの構築が必要
 ではないか？ということで、
 『農村のライフスタイル』がテー
 マである。

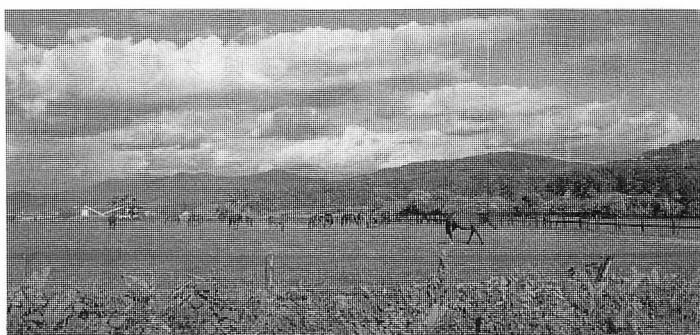
会場前方に座る司会陣（三名）

と、全国から集まった事例発表者
 （十二名）はソーソーたるメンバ
 ー。その中に、愛媛県から参加の
 五十崎町の亀岡徹さんの顔が見え
 る。亀岡さんは「価値ある暮らし
 は地域を選ぶ川とともにある農
 村の快適ライフ」と題して、お馴
 染みのトーンで発表され、常に
 「地域づくりは錯覚の世界である」
 ということを強調された。終始静
 かな雰囲気だった会場が、その時
 間だけは和やかな笑いの渦に巻き
 込まれた。本県から同行していた
 川之江市のM氏が、手を叩き腹を
 抱えて喜ばれていたのがとても印
 象的だった。

【これは錯覚の世界？】

道は果てしなく真つすぐ延び、
 地平線は遥か彼方まで続く。十年
 前の感動が再び蘇り、私を不思議
 な気持ちにさせさせる。

今回知り合った友は、信念を持
 ち自己主張も強く、個性豊かで味
 のある方々であった。そして、食
 した本場北海道の味はというと、



放牧風景

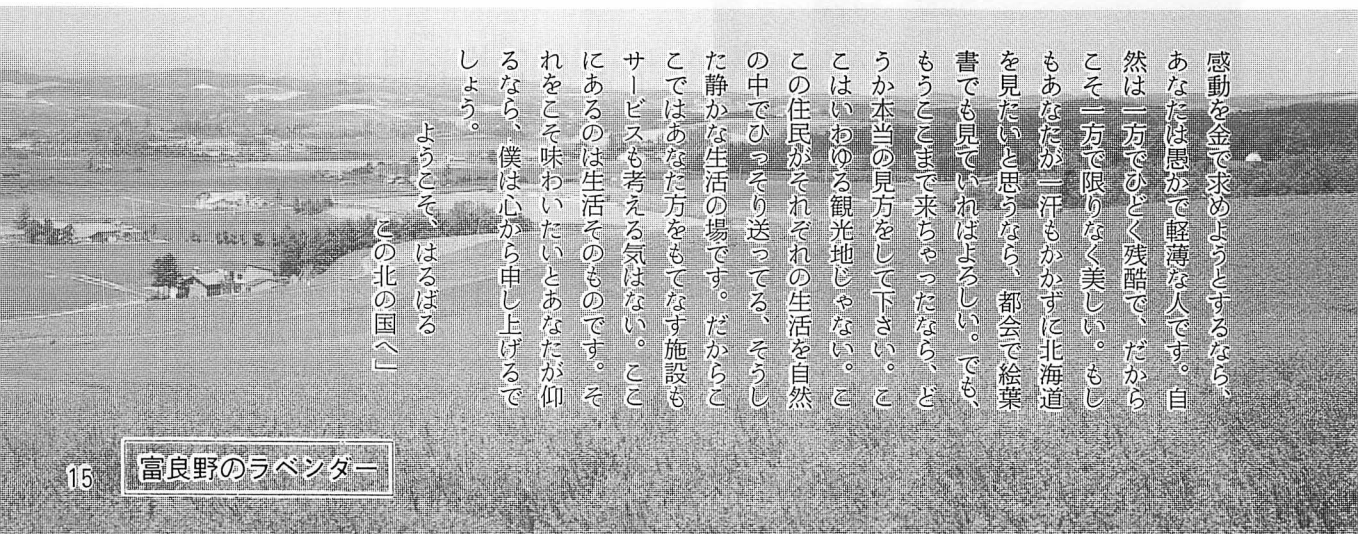
これがまたベリー・ゲーとくるの
 だが、ここで亀岡さんの言葉を借
 りるのならば、「錯覚の世界」と
 なるのだろうか？

最後になりましたが、今回講演
 された倉本聡氏（シナリオ作家）
 の言葉を紹介して終わりたい。
 「自然を労せずして見たいと願う
 なら既にあなたは傲慢な人です。」

感動を金で求めようとするなら、
 あなたは愚かで軽薄な人です。自
 然は一方でめどく残酷で、だから
 こそ一方で限りなく美しい。もし
 もあなたが二汗もかかずに北海道
 を見たいと思うなら、都会で絵葉
 書でも見ていればよろしい。でも、
 もうここまで来ちゃったなら、ど
 うか本当の見方をして下さい。こ
 こはいわゆる観光地じゃない。こ
 この住民がそれぞれの生活を自然
 の中でひっそり送ってる、そうし
 た静かな生活の場です。だからこ
 こではあなた方をもてなす施設も
 サービスも考える気はない。ここ
 にあるのは生活そのものです。そ
 れをこそ味わいたいとあなたが仰
 るなら、僕は心から申し上げるで
 しょう。

ようこそ、はるばる

「この北の国へ」



地域づくり 裏方さんの夜なべ談義 —— 実践編 ——



実験劇場とやま
富山県コロンブス計画

（財）愛媛県まちづくり総合センター

国田 敦彦

▽ プロローグ △

夏真っ盛りの八月三日・四日、北は北海道から南は九州熊本まで約一〇〇名の「裏方さん」が「夜なべ談義」のために集結。

場所は、知る人ぞ知る富山県利

賀村。「利賀フェスティバル」「利賀そばまつり」などでありながらも有名な所である。富山市内から利賀村へは車で約一時間三〇分。参加者の乗った大型バスは、ガードレールのない曲がりくねった狭い道を、ベテラン運転手の神業的な運転で、会場となる「高齢者生産活動センター」へ無事、到着。

バスから降りたった人の顔は心なしかホッとした様子であった。（利賀村へのアプローチには、別に広い道があり、安心して行くことができる。）

この「裏方さんの夜なべ談義」は、住民参加型のイベントを通して地域づくりを目指す富山県の「コロンブス計画」の企画で昨年に引き続き開催されたもの。

昨年は県内外に地域づくり関係者のネットワークを広げることを目的としたが、今回は「実践編」と銘打ちイベントの企画、パソコン通信の運営に実際に参加している人を対象に企画された。

▽ ゲストトークから… △

開け放した窓から、心地よい風とセミの声が入り込む中、まず愛知県犬山市にある野外民族博物館「リトルワールド」の研究員小林繁樹さんが「集客力なぜ人は集まるか」と題して約一時間の講演を行った。

小林さんの活動拠点リトルワールドは、移築した家屋や資料により、各国の生活や文化を紹介するというユニークな博物館で、十七の国々から二十八の家屋を移築・復元し、展示・紹介している。

ゲストトークの中から、興味のある話を二つ、三つ…。

小林さんによると、「なぜ人は集まるか」という問いに対する答えは「面白いから」ということである。この「面白い」という気持ちは、身体的、生理的な「楽しい」という気持ちに、知的価値観が加わったものであり、



ゲストトークから… 小林繁樹さん

「知る」「分かる」「理解する」という側面を持つ、いわば「頭脳に訴える楽しさ」であるという。

例えば、知らないことや非日常的なことに接近できた時、好奇心が持てる対象に出合った時、「面白い」のである。この「面白い」というものの感じ方は、時代・地域・人・時間・世代によっても異なり、多様で個性的なものであるとのこと。

そんなわけで、「本当に訴えたイベントを行っても、人が来ないという悩みがある」し、「人を多く集めるためには本来の目的から外れてしまう」という矛盾も出てくる。しかし、「関心を持つ人が少なくとも、やらなければならないイベントもある」と強調。

イベントを企画する際に、ひとつの参考となりそうなお話であった。

▽ 第二分科会から： △

ゲストトークの後、会場は二つに分かれて分科会へと突入。

私は、「コミュニティ・ネットワークの今日と明日」をテーマとする第二分科会に参加。富山ハイパーネット研究会の伊達康司さんが進行役を務め、大分パソコン通信研究会（コアウ）事務局長の尾野徹さん、東急総合研究所研究員の大和田順子さん、富山県のパソコン通信「LA INER TOY A M A」の運営・管理を担当する椎名久之さんが、それぞれのネットワークの技術的な説明や情報提供の内容などを説明した。

その中で、パソコン通信グループとして草分け的存在である「コアウ」の尾野さんが、現在のパソコン通信においては、縦のつながりはあるが



第2分科会「コミュニティ・ネットワークの今日と明日」

横のつながりが無いことを指摘され、別のネットワーク同士のつながりの必要性を説き、現在、大分県でこの活動を展開中とのことであった。

第二分科会の参加者のうち約半数のパソコン通信未経験者にとって分科会の話の内容は、少々専門的すぎる面があったと思う。

しかしながら、私のようにネットワークを広げるといふ目的（主催者の意図には反しているが）

のために参加している者にとっ
ては、地域づくりに携わっている人だけでなく、様々な人と交流を深めることができ、意義深いものであったと思う。

▽ 利賀村の夜は更けて： △

分科会での白熱した議論のあと、いよいよ待ちに待った「夜なべ談義」へと突入。行政マン、シンクタンクの研究員、地域づくりの活動者等様々な職種の人がいくつもの車座を作り、口角泡を飛ばして自分の地域づくりの思いを伝え合った。分科会の会場では話せなかったことも、アルコールの力を借りれば、本音の話もちらほら。やはり、このような会において夜の交流会は、真のネットワークを広げる意味でも非常に重要であると改めて実感。

私は途中、利賀フェスティバル観劇のため中座したが、帰ってからも延々と「夜なべ談義」は続き、利賀村の夜は更けていった。

▽ エピローグ △

最後に、利賀村からの耳寄りな情報を一つ。

利賀村では、平成四年八月七日から九月六日まで「世界そば博覧会」の開催を予定している。これは、富山県が平成四年七月十日か

ら九月二十七日まで実施する第一回「ジャパンエキスポ富山'92」の協賛博として開催するものである。計画によると「そばの世界」そのひろがり」と出会い」をメインテーマに二会場で開催とのこと。

第一会場では、世界・全国のそば料理が味わえるメイン施設「世界のそばグルメ館」を中心に、そばの栽培・科学・歴史等を物語的に紹介するテーマ館、世界・全国の物産バザール、野外舞台等の施設を整備する計画。

第二会場では、既存のそばの館、そば通のためのこだわりの施設ご一つお館、新たなそばファンのためのうまいもん館、専門的なそば・だし・調味料の情報を提供するそば文化センターなど、うまいそば料理のための施設を整備する計画。そばファン、利賀村ファンの方は、是非どうぞ!!。



財産は友達

広見町 二宮 美日^{みひ}

私は広見町で『ふるさと通信あいら（愛里）』という月刊誌を出しています。

よく人から、

「どうしてそんな仕事を始めようと思ったのですか？」

と、聞かれます。答えは簡単、

「昔から文章を創作する仕事があった。でも田舎にはそんな職場がない。だから自分で作った」あんまり深い考えはないんです。

松山で劇団（演劇研究会「虹」）を作った時も、

「芝居がしたかった。でも自分の入りたい劇団がなかった。だから自分で作った」

それだけなんです。

そして私が田舎（広見町）にUターンする事になり、友人が

「広見町でも芝居をしよう」

と言うので、そのまま続けてはや七年目。

要するに、好き勝手に生きてる

だけの気まま人間なんです。

ただそういう事をする場合、決して一人ではやれません。仲間が必要です。それも親身になってくれる仲間が。



8月24日の公演の時です。
（白いドレスが二宮さん）

私の一番の財産は友人です。いい友達に恵まれて、とても感謝しています。まだ弱者ですし、お金なんてありません。でもお金がなくても良き友さえいれば、何でもできると実感しています。

そして今の仕事を始めて、いろんな方と出会う機会が増え、知人ができ、それらの人と友達になっていけるのが、何よりの楽しみです。

人と付き合う時、できるだけその人のいい面を見ていこうと心掛けています。（人間ができてないので、できない時もあります）

芝居の演出をする時もそうです。役者のいい面を引き出せる演出をしたいと思っています。（これも力不足でなかなかできません）

町づくりなんかもそうだと思います。その町のいい面を見つけて伸ばしていくことが一番ではないでしょうか。

良い面が伸んでいくと自信がつき、余裕ができてきます。そうすると自分自身の悪い面にも目を向け、認めることができるようになります。

ります。認めることができなければ、悪い面を直すことはできません。そうやって悪い面を直していけば、人も地域もよくなると思います。

最後になりましたが、『愛里』とは、ふる里を愛するという意味です。ふる里は、広見町であり、愛媛県であり、日本であり、この地球です。ふるさとの優しい心を伝えたい！

ふるさと通信あいら（愛里）興味のある方はTEL 0895-14810422（有）虹企画までご連絡下さい。

今回は、熱血農人間・大洲農業改良普及所の井尻弘さん（大洲市）です。

これが、うわさの「あいら」です。



新居浜ベンチャークラブの夢

新居浜市 大久保 佳子

ベンチャークラブとは、地域社会に関心を持ち、その地域の発展のために、積極的な役割を果たしたいと願う、十八〜四十才までの職業を持つ若い女性の国際的な奉仕団体です。私達新居浜ベンチャークラブは、一九八八年五月に国際ソロプチミス・新居浜をスポンサーとして誕生し、「冒険なくしては何事も得られない」をスローガンに、奉仕事業や交流パーティー、その他地域活動に多種多様に参加し、社会を勉強しながら会員間のつながりを深めてきました。

現在クラブメンバーは三十五名で、平均年齢二十四才。殆どが独身。私のように、既婚者で子供がいるのは、数人です。最近の社会の流れでしょうか、「マドンナブーム」の影響なのでしょう。か、認証当時より、若い女性の団体という事で大変注目され、結構忙しい日々を送っています。新居浜とい

う土壌も、私達の活動を理解してもらうのに、適していたのかも知れせん。というのも皆様御承知のように、新居浜は、県内随一の工業都市で大企業の傘の下で発展を遂げてきた街です。それが五十年代の不況のあおりで、街全体が沈滞ブームの中、市民一人ひとりの心の中に「自分達でなんとかしなくては、」という強い意志が働き、あちらこちらの組織に「街を明るく」というムードが高まり、行政も、市民の声に、広く門戸を開いてきた時期であったからです。

そんな中で、私達のような若い女性の団体ならではの感性を生かした活動を考えてきました。一例として、ここ数年、若い男女に交流の場という事で「バレンタインパーティー」「エイプリルパーティー」を企画し一応の成果を修めてきました。当初、企画の段階で「本当に、人が集まってくれる

のか」と、手探りのイベントでしたが、蓋を開けると大盛況で、私達もすっかり自信を持ちました。私から見ても、若いメンバー達のエネルギーには、目を見張る物がありました。世間一般に言われている「今頃の若い人は……」と言うのは、あくまでも一般論で、導き方によって大変な力を発揮してくれることを身をもって痛感しました。

この新居浜には、私達だけでなく数多くの団体が組織され、それぞれ独自の活動を行っています。皆「我がまち・新居浜」を良くするための活動です。私達市民の努力次第で、数年前のダークグレーのイメージを、一挙にホワイトに変えるのは難しくても、ライトグレーに変えるのは、意外と容易かもしれません。

私は、クラブ認証式の際「私達新居浜ベンチャークラブは、新居浜を母なる幹として、地域社会の人々が憩えるような木蔭をもつ、大きな木々に育ってゆきたい」という大きな夢を抱きました。その

夢が、少しずつでも、叶えられてきているのを肌で感じながら、エネルギーを燃やし続けていきたいと思っています。

次回は、新居浜市の清水美里さんです。

上段、右から2番目が
大久保さん



草木染に魅せられて

みゆき
三幸グループ
今村 芳子



★ 草木染に魅せられて

町おこしと称してどこの町村も特産品作りに大わらわ。そんな中「私達も町おこしを……。」

との思いで主婦四人で取り組んだのが玉葱の皮で染める草木染です。台所でいつもころがっている玉葱、三間町は国の指定産地となっています。いままで玉葱出荷の際に出る外皮は全て捨てられていました。これを使って何か出来ないかということで始めたのが草木染

です。「三間町に幸を」との大きな願いからグループの名を「三幸^{みゆき}」と名付けました。

★ みんなの協力があつたから

何といっても、ずぶの素人が染色するのですから考えただけでも無茶です。そこはオバタリアンの強引さで商品化にもっていききました。私達の気持ちに通じたのか、助っ人の多かったこと。先ず第一に農家の皆さんは、玉葱出荷の際に根と皮に分けて袋に入れて下さいました。大変手間のかかる仕事ですが心よく協力して頂きました。

染色の技術の方は商工会で染色の専門家をご紹介下さったり、パッケージ等のデザインに迄のって頂きました。資金面、販売ルート等、大変多くの人達の

ご助言やご指導でやっとここまで来たのです。

★ 清良染誕生^{せいりょうぞめ}

染色の勉強中の時には、松山、今治に向いて実験を繰り返しました。化学式を使つての説明に、チンプンカンプン。学生時代を思い出し、泣きたい気持ちになったのは私だけではなかったようです。「さあ、色が出たノ」

「何を染めようか？」

「布はどこで仕入れたらいい？」
こんなことの繰り返しでした。

「清良染^{せいりょうぞめ}」っていい名前でしょう。私達は初め、「たまねぎ染」として商品化しました。

「たまねぎの臭いがしないか？」
「このハンカチ、目がいたくならないかしら？」等、

品物を手に取り、臭いをかぐお客さんさえました。商品のイメージとしては、今イチでした。そんなある日、恩師K先生の「清良染にしたらどうぞ」との一声で決まりました。戦国時代の三間の武将で現在も町民から「清良さま」

と慕われている「土居清良」から頂いた名前です。

★ 染色の妙味

現在、色は茶、黄、こんぶ色、肌色があったピンクの四色です。草木染独特の渋味のある色合です。大きな釜で皮をグツグツ煮込んで茶色の原液を作ります。その中のり落した布を入れ、しばらくつけ込み、水洗いの後、媒染剤に浸けて発色させます。この工程を何度も繰り返すことで、より良い製品が出来上がります。媒染剤は無害のものを使っています。それでも河川を汚してはいけないので、薬品は流し捨てることはしません。染色のおもしろさは、同じようにやっても微妙に違うことです。温度や皮の分量、布の種類、水質等によって釜ごとに色が変わってきます。これが草木染の良さでもあるわけです。

★ こだわりこそ大切

草木染の弱点は色落ちの問題と、天日干しの問題があります。近頃

の洗剤には漂白剤が入っている物が多く、注意しなければなりません。清良染も当然、色落ちの問題に直面しました。ちょうどその頃、NHKテレビの「人間ドキュメント」で島根県の染色家の紹介がありました。助けの神とばかり、私達四人は強引に入門し、二日間ご指導を受け技術を教えて頂きました。私達の玉葱にこだわっている気持ちを通じての事です。

「そのこだわりこそ大切、がんばりなさい……。」

と励まして下さり、染色技術はもちろん、経営ノウハウまで教えて頂きました。またまた夢は大きく膨らんだわけです。

★ メンバーは四人十色

ここでメンバーをご紹介します。会長（総務）に善家幸さん、おっとりして優しい一番年上のお姉さん、年齢順にいくと私、渉外係の今村芳子、のん気者ですが仕事は手ばやく、いや雑いのかも知れませんが縫製が得意です。管理に平野加代子さん、几帳

面でしっかり者ですし何事にも一生懸命で努力家です。会計は高山和美さん、四人の中でちょっとだけ若いせいか、少し控え目で、アイデアの持ち主であります。四人の共通点は「ズッコケ」が大好きなこと。いつも楽しく仕事をしています。時には手は動かず口ばかり……という場合もあります。こんなこと紹介したら後日お叱りを受けるかも知れませんね……。

★ 感謝の気持ちを忘れずこれからも

清良染がデザインコンクールで最高の特賞に選ばれました。平成二年六月のことです。『えひめむらおこし産品デザインコンクール』（県・県商工会連合会主催）の日用品部門での受賞でした。

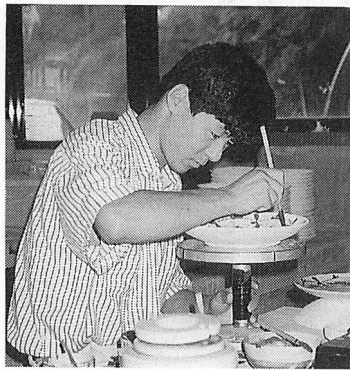
むらおこし事業として、清良染に取り組んだのが昭和六十二年、その間、地域の人達の温かいご支援のお蔭で、ここまでやってこられました。感謝の気持ちで一杯です。玉葱染は全国でも珍しいとの事でテレビ、新聞等で紹介されたこともあります。製品としては、

袋物・ハンカチ・エプロン・Tシャツ・ネクタイ・スカーフ等です。

これからは高級な絹にも挑戦してみたいと思っています。絞りをほどこす胸のときめき等まだまだ趣味から脱しきれませんが、染色技術は奥の深いものです。これからも絶えず勉強しながら、より良い製品作りに努力したいと思っていますので何かご意見やアドバイスがありましたら、よろしくお願い致します。



島根での研修



私が焼物の仕事を広田で始め、早くも三年が過ぎました。この道に入ろうと思ったのは、中学三年の後半でした。それで松山南砥部分校のデザイン科へ進み陶芸コースを選択しました。ちょうどその

はじめに…



頃、私の住む村では、地元産出の陶石を陶芸の材料として村外へ供給するだけでなく、村内で製品を作り陶石に付加価値を付けよう、そして、村に産業を起こそう、という議論や考えが起き、ある日そうした内容が新聞に掲載されました。砥部焼に数十年取り組んでいた中田さんがその記事を読まれ、村の産業育成の一助になればと早速村へ来られ「陶芸舎」(中田窯)の誕生となりました。その「第一陶芸舎」周辺には、村おこし事業の一環として「ふるさと館」「こぶしの家」などが整備され現在村の看板となっています。

陶芸への道は

焼物の方は、そうした活動が起きてから今日までの六年間の間に四つの窯元が増えました。私がその窯元の一人として焼物を始めたのは高校を卒業してすぐでした。そんな私には、焼物の技術的なことや窯に関する経理や運営など分からないことばかりでした。でも技術的な面や運営は、中田窯へ定期

積君、人間をつくれ!

焼き物作りで大切なことは、色々あると思います。一番大切なのは、物を見る眼(美を感じる眼)だと思います。美術館などへ行き、たくさんいい物を観て下さい。作品には必ず自分自身が現れてきます。人間をつくること、磨く

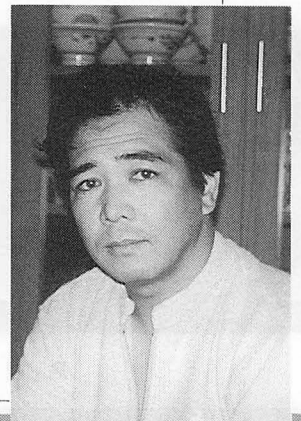
的に週何日か通うことで修得し、(現在も通ってます)経理は商工会で教えて頂きました。村からは、人材育成事業により支援して頂くなど、多くの方々のご指導やご支援により陶芸の心が少し分かった今日この頃です。

苦悩の日々

自分が決めた道、仕事といっても楽しいことばかりではありません。精神的な圧迫と何とかしなければという気持ちのあせりの両方で初めの一年間は何をしているのか分からない状態でした。そんな時、「村なんか居ちゃいけないよ」「どこかよそへ勉強なり修業

ことを心がけて、一緒に頑張ってくださいませよう。

中田 正隆(中田窯)



に行ってきたらどうか」とある人から言われました。そんなこともあり村の方に相談したら余り良い返事が返ってきませんでした。おそらく一度村外へ出ると帰ってこないと思ったのでしょうか。随分悩みましたが、中田さんに相談したら、「今の君は、焼物だけしか眼が向いていない」「本を読んだり、友達と遊びに行ったり色々な経験や体験をすればいい」「ある目標に向かって進むのはいいがそれが極端だと途中で挫折してしまうよ」「富士の裾野のようにならないと」「まだ若いんだから」というアドバイスを頂きました。

数多い豊かな体験を

それからは、青年団活動へ自主的に参加し活発に動き、他町村のイベントや催しに参加したり見に行ったりしたものです。そして思ったことは、どこかよその土地へ行ってくればいいという考えよりも、自分自身の前向きな取り組み姿勢が大切であると分かったのです。

広田村と答えたい

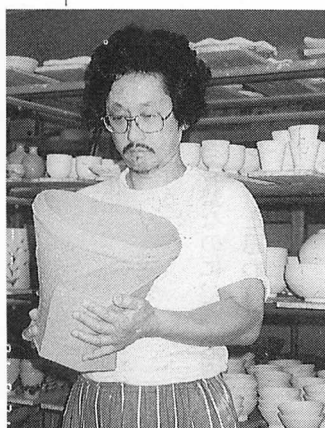
確かに、東京は情報も人も物も

宇都宮君、自由な心で、

広田村で、陶石を生かした焼物が行われている中で、宇都宮君が焼物を始めて、三年たち四年目に入ろうとしている。

ひとつの地場産業としての焼物が求められているが、もちろん個人の充実なくしては成り立たない。

宇都宮君も私も、今から十年、二十年とその作業を繰り返すことによって、焼物の身体になり精神になり、焼物独特の人間になれるかもしれない。



豊富かも知れません。でも何もかもすぐれナンバーワンなのか？地方より都市がいいのか？「どちらから来られましたか」と尋ねられ「〇〇村から来ました」と言うのが恥ずかしく思い、ついついそれを言ったりする話を時々耳にします。でも私は、堂々と声高らかに「広田村」と答えたい。広田には、広田しかないオンリーワンがあるのだから。ついこの間のこと、「広田村」と答えたら「南予の山奥の方ですか」と聞かれたことも

また、宇都宮君自身、地元出身ということで期待も大きいようだが、地元ということだけではなくもっと広い意味の焼物を考えていくことも大切なんじゃないのかな。何かに規制されることなく自由な心で。河端 一海（一海窯）

ありました。自分も県内で何箇所か知らない市町村もあります。焼物を通して広田村の地名度が上ればいいなと思っています。村は最近、道路もずいぶん良くなり発展している部分もあります。しかし人口は、ますます減っています。そこには、村で働く場所が少ないのと、子供の教育の問題があると思います。これは、若い私達にとっても関心の高い問題ですし、先に結婚相手を見つけることも大切な問題です。そうした問題点もありますが、自然が豊かで人情味のあ

おわりに

私は、広田が誇れる日本一の産出量の陶石資源を活かした焼物産業育成による町づくりは大変いいことだと思っています。地場産業が確立できれば、新しい文化も生まれ、村自体に元気がみなぎってきます。今後は、より一層技を身につけ何年か先には展覧会へ出品



第2陶芸舎（積さん達の工房）

したり、個展も開きたいと思っています。おりますし、焼物を広めるため子供達の陶芸教室にも力を入れたと思っています。陶芸を体験した子供達の中から陶芸の道へとあとに続く人が出てくるかもしれません。

最後に、仕事以外にもサークル活動や色々な行事、イベントの企画をしています。そうした色々な体験を積み重ねながら自分を磨き、広田と一緒に焼物をしている先輩と共に焼物を広めながら、地場産業として広田焼の発展をめざしてゆきたいものだと思っています。



OGUNI ビーナスの会 伊津見さんと

元気、やる気、根気

— 楽しみながら10年を目標に —

丹原若者塾 山内 雅明

若者塾とは

「小国おぐにが好き」

「丹原若者塾なのに、“小国”

とはなんじゃ」と思われた方もいるかもしれませんが、これが若者塾のハートです。

今年の三月、熊本県小国町にお邪魔した時、“OGUNI” ビーナスの会”の伊津見さんに私達が、「なぜ、そんなに元気よく活動出来るのか？」と尋ねた時の答えなのです。私達が住んでいる、そしてこれからも住む「丹原が好き」だから、若者塾として活動が出来ることを再認識させられた言葉です。

私達が若者塾に集まった時に、丹原に何か物足りなさを感じ、楽しく生活できる町に出来ないか、何か出来ることはないか、出来ることからやってみようと思いました。それは、誇れる町、住みやすい町にしたいからというような理屈だけでなく、「好き」だから何でも出来る、義務としての活動でなく、権利とし

ての活動を一人ひとりのメンバーが感じたから、二年間続けてこれたのだと思います。



後列左端が山内さん

好きな人の事を知りたい、そのためなら少々努力は惜しまないし、何かしてあげたいと思うのは当然ではないでしょうか。

活動

私達は、まちづくり総合センターの「ふるさとコンサルティング事業」を通じて、アドバイザーの方々に「汗を流して地域を手の中に取り込む行動をしない！」「地域を足で歩いて知らない！」と指摘されました。また、定例会を重ねる中で、今の世界中や日本中の出来事は知っているのに、この町の事は知らない事に気付いたのです。そして、写真を通して、「丹原の再発見」をしてみようと、一年余り写真を撮り続け、今では「若者塾とは写真クラブか」と間違われる程です。でも、普段、車で通り過ぎるだけの見慣れた風景も改めて歩いてみると、そこには新しい発見や感動が必ずあるものです。

住んでいる人に、この町の良さをもっと知ってもらいたい、好きになってもらいたいと写真展を開催しています。写真を見て、今漠然と丹原に住んでいるという人から、「改めて見れば、なかなかこ

こも捨てたものじゃない」という感想も聞くことが出来ました。これからも丹原にこだわって、様々なテーマで写真を撮り、今年の夏にポストカードを作ったように、色々な写真の使い方を考えていきたいと思っています。

これから

丹原は特色もなく中途半端で、人口も減少中の町です。このような活気のない町だと、「それ工場誘致、やれ人集め」に目が向いてしまい、それが、過疎の活性化の特効薬のように言われることが多いのですが、果たしてそれしかないのでしょうか、丹原にはもっと大事な事があるのではないのでしょうか。全国の町村あるいは我々のようなグループが同じことをしながら、もっといいんじゃないのかと思います。

悩むことは、悩んでも与えられた回答しか見付けられない。問題は何なのか考える前に回答を探しだそうとしているような気がします。考える事は他人に任せ、誰か

に与えられた回答で諦めてしまう。何かに踊らされているような気がします。表面的なものだけを追い掛けて、ブームを必死に追い掛けて、後に残るのはお荷物と疲労感、挫折感だけだということのないように、本当に大切なものを探し出す汗と努力を惜しまないようにしたいと考えています。

大切なもの

丹原は、昨年過疎地域に指定されましたが、人が減ることが問題ではなく、「生活の豊かさとは、田を渡る風を感じる感性」と「人間が自然と共に暮らして行ける、穏やかな風景の町」を無くさないようにすることが大切だと思っています。本当の危機は何かを知らせるような危機感の演出をし、同じ時代に同じ地域に生活する者同志として、大切にしなければいけないものを、例えば田園風景を大切にするための連帯と共生感を作り出す手段を、今、模索中です。そして、田園風景を大切にするためにも今までの農業でいいのか、

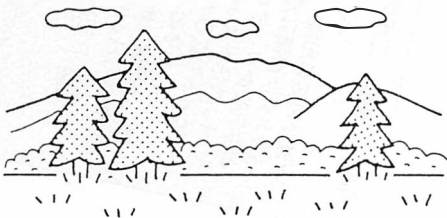
楽しい農業、自立できる農業、知識集約型産業としての農業の確立、ただ儲けるためだけでなく、立地を活かし連帯の輪が広がり、意欲や創造性が伸びるような農業は出来ないか、そのための意識改革、価値観の転換を図ってみたいと思います。

若者として

さらには、若者が楽しく暮らせる町にするにはどうすれば良いか、処方箋はまだありませんが、我々が元気なら、次の時代も元気になると思っています。元気がない、元気がないといっても仕方がないし、自分達から元気良くしようと思っっています。またカウ元気で仕方がないので、自分達が少しづつでも成長しないと地域を変えていくことは出来ないと思いますし、去年よりは、少しでも一人ひとりが成長し、感性を磨ければと考えています。

などと考えても、頼れるものはネットワークと自分達だけ、まず行動し、人と会い、話すことでそ

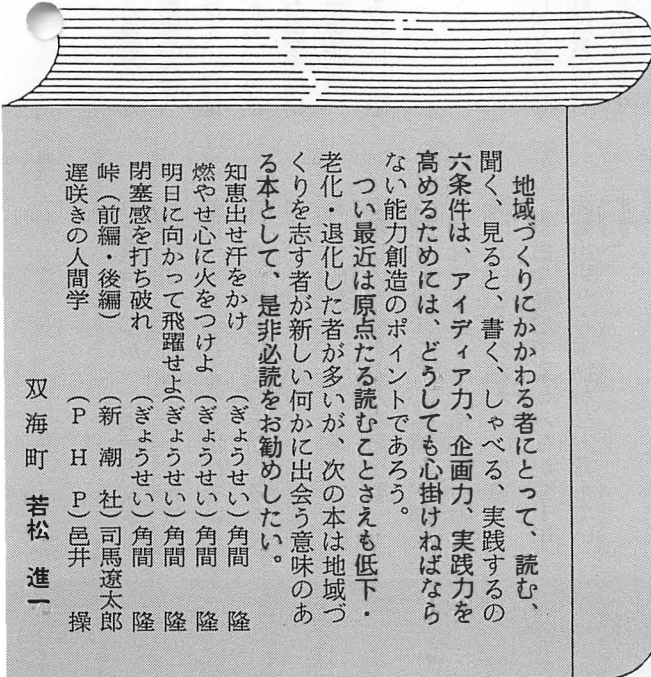
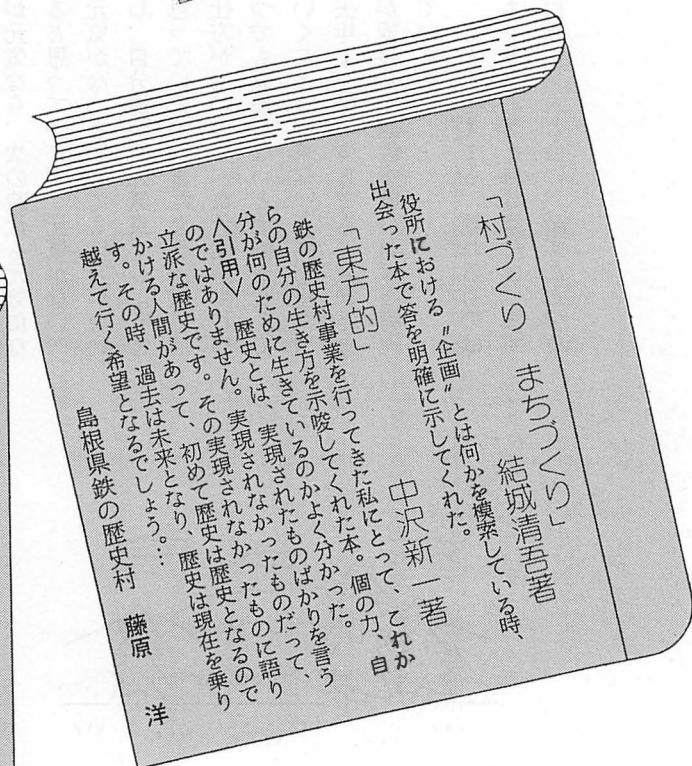
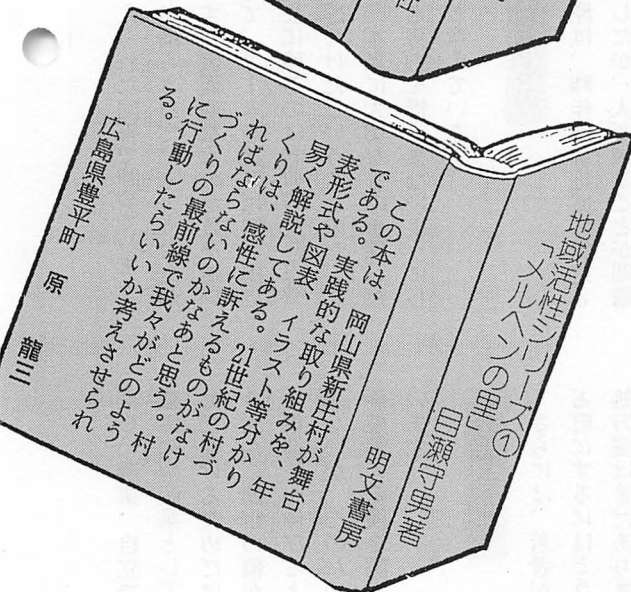
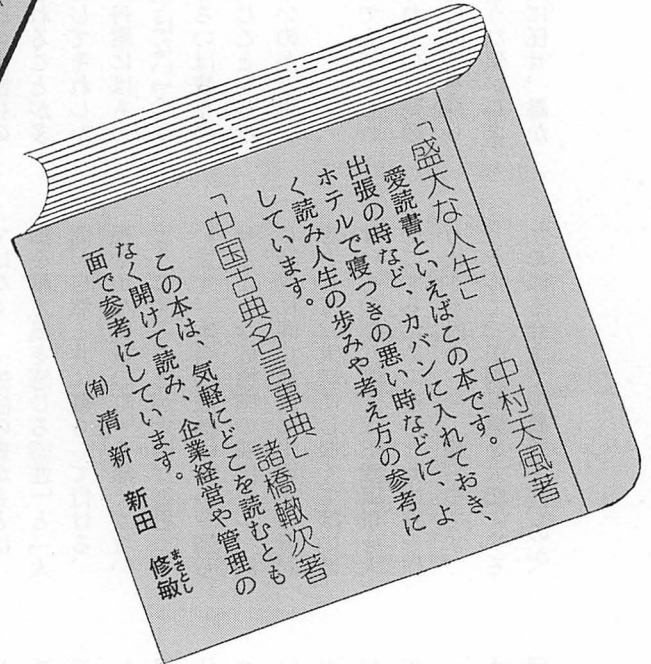
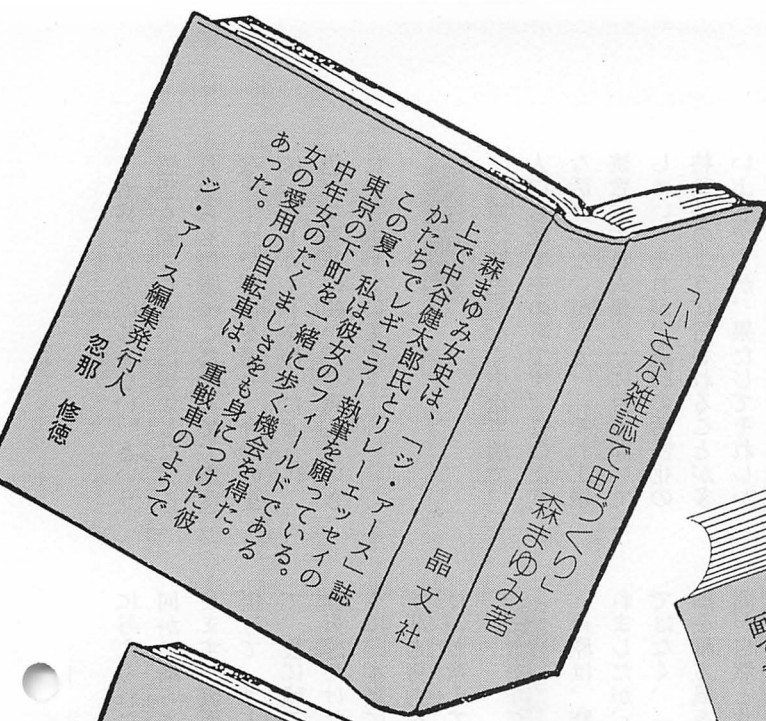
れ迄気付かなかった地域の良さと自分を知り、刺激を受け、元気を分けてもらうことを心掛けています。外に向けて格好を付けるのではなく、メンバーがお互いに影響しあって成長し、それを通じて丹原の新しい方向を考えるような、土を耕すだけでなく心も耕し、種を播き育てるような、地道な活動を続けていこうと考えています。



推薦する



(感銘を受けた本
&愛読書)



Town タウン

パソコン通信ネットワーク

広げましょう ヒューマン ネットワーク

Vol. 19



えひめコンピュータコミュニケーションクラブ

知らないよりは、知ってる方が
より楽しくなるECCCの操作。
その3です。

最初に、チャット編の補足です。
誘う相手が○で自分が×の時
も、チャットの申込は出来ます。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

さて、メインメニューから分
れる「3. オフィス街」と、「4.
メインストリート」は、何処が違
うのでしょうか。

最大の違いは、「3. オフィス
街」には、今読んだメッセージに
コメントを付けるCOコマンド
(半角のみ受け付け・マニユアル
P44)と作者にメールを送るRE
PRYコマンド(これも全角は、

だめ。半角のみ受け付け・マニ
アルP41)がないことです。

もちろんこれらのコマンドは、
どのメッセージに対するレスポ
ンス(返事等)かを明らかにして、
よりスムーズな意見の交換等が行
われるようにと用意されているも
のですから、「4. メインストリー
ト」だけで機能します。

つまり3では情報等の公開がな
され、4では情報等の交換が行わ
れて欲しいことをあらわします。
しかし色々な工夫をすることで、
3に書かれたものでもスムーズな
情報等の交換は可能ですから、最
初のTOWN設計意図と異なる場
合が生じても、決して、してはい
けないというものではありません。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

電話代が苦しいときや、興味の全
くない、大きな書き込みに当たっ
てしまった。これもなんとかなる
のです。

TOWNでは、漢字で一万字し
か一つのメッセージに書くことは
出来ませんが、パソコンでは、コ
ントロールキーを押しながら英字
のXを押すことで、今読んでいる
メッセージをキャンセルして、次
にリターンキーを押せば、次のメッ
セージを読むことが出来ます。

ワープロでは、機能キー等個々
に違うものに割り当てられていま
すから、ワープロの説明書を探し
てみて下さい。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

書き込み中に文字化けや文字抜
けがあって、自分の意図が伝わら
なくなっている。こんな時にあっ
さり消していませんか? ちょっと
待って欲しいんです。

もう一度アップロードの所を選
んで、同じ操作をして下さい。
そして最後の操作、「3. 送る」
を選ばずに、「4. 直す」を選択

して下さい。すると、何番のメッ
セージを書き換えますかと聞いて
きます。ここであらかじめ調べて
おいた、番号を入力すると、書き
換えが行われます。(マニユアル
P46)

ただ、問題なのは、内容に間違
いがあり、それを正したい場合で
す。単に書き直したのでは、ニユ
メッセージとして扱われないので、
書き直した事を新たに書くか、以
前の内容の訂正を新たに書く方が
望ましいと思います。

言うまでもないことですが、書
き直す事が出来るのは、自分の書
いたメッセージだけです。

消去されたメッセージというの
は、味気ないものですし、一体何
が書いてあったのだらうと、気に
もなるものです。(こういう時は
悪いことはかり考えたりする)

せっかく用意されている機能で
すし、TOWNの機能をフルに使っ
て、よりスムーズなコミュニケー
ションで、楽しくて楽な通信生活
を送って下さい。

(柴田 悟)

お 知 ら せ

『えひめ地域づくり研究会議 91年次総会フォーラム』開催

テーマ 『今、あらためて過疎を考える』

— まちの過疎、むらの過疎の現状から地域づくりの在り方を模索する —

- ◇と き 平成3年11月30日(土)
◇ところ 喜多郡内子町「うちこスポーツイン」
◇主 催 えひめ地域づくり研究会議・愛媛県まちづくり総合センター・内子町
◇内 容 11月30日(土)

13:30 開 会

13:45 基調講演

「農と食の危機を如何に生きるか」

講師 島根大学講師 乗 本 吉 郎 先生

15:30 分 科 会

第1 農山漁村における過疎の現状、

第2 過密から過疎へ真実の暮らしを求めて、

第3 それでも……、番町校区が好き、

会員による過疎についての研究報告をもとに分科会を進めます。

17:30 全 体 会 (分科会報告とフロア討議等)

18:30 交 流 会

12月1日(日)(希望者のみ)

9:00 オプショナルエクスカーショ

(内子町・五十崎町タウンウォッチング)

12:00 解 散

◇参加費 総会フォーラム 1,000円・交流会 3,000円・宿泊費 4,000円

◇申込先 (財)愛媛県まちづくり総合センター内

えひめ地域づくり研究会議事務局まで

。台風十九号は、予想以上に、各地に大きな爪痕を残し過ぎ去った。生活の根城であった家を壊され、経済の基盤であった農作物に被害が出たりと災害の恐さを感じます。被害に遭われた地域の皆様に心からお見舞い申し上げます。

聞くところによりますと、栃木県茂木町等、災害をバネに誇れる町づくりを行い、現在先進地となっている町や村もあるようです。

私達に出来ることは、被害に遭われた地域に対し、出来る限りの支援をしていくことではないでしょうか……。

どうか一日も早く、地域の人々の汗と力で逞しく甦ることを心からお祈り申し上げます。

「舞・たうん」編集係

TEL ○八九九(二五)五五五七

FAX ○八九九(二五)六六八〇

発行・平成三年十月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議